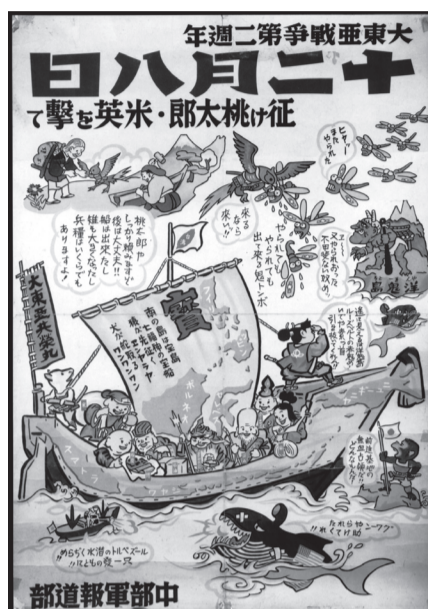


加原奈穂子
KAHARA nahoko

モモタロサンの歌



大東亜戦争二周年記念ポスター(小川護氏蔵)

「モータロサン、モモタロサン」。誰もが知るあのメロディーを、時に懐かしく思い出すことがある。数年前、台湾南部の村に研究調査で滞在していた時のことだ。色鮮やかな道教の廟を背に、村で知り合った親切的な青年、蔡君が朗々とした声で歌ってくれた。日本の統治時代に育った祖父から習ったという、片言の日本語。そして唱歌。蔡君がわたしに聞かせてくれた「桃太郎」の歌は、日本と台湾の歴史を心に刻む音色でもあった。

日本の昔話の中で、桃太郎ほど、時代の流れの中で様々に姿を変えてきた例はない。その顔だけ見ても、どれ一つとして同じものはない。「桃太郎」という同じ一つの名前で呼んで、誰も疑問に思わないのが不思議なほどだ。

本来、土地の暮らしの中で語り継がれてきた桃太郎話は、豊かな語り口を持つてい

た。その主人公たちは、実におおらかで愉快である。ごろごろと寝てばかりで鬼退治に行かない、怠け者の桃太郎。鬼退治の後にいい気になって、犬猿を相手に放蕩三昧、挙げ句の果ては鬼に仕返しされてしまう桃太郎。語り手が繰り出すお国ことばのやわらかな響き、子どもたちとのやりとり、物語が息づく温かい家庭の様子までもが、目に浮かんでくるような話が多い。語りを文字でいくら正確に記述してみたところで、物語を取り巻く世界そのものは到底再現できるものではない。

口伝えの世界が消えてゆく一方で、桃太郎は各種のメディアの中で着実に増殖を続けてきた。桃太郎が書物に登場したのは意外に遅く、江戸期に江戸や上方で出版された庶民向けの絵本に現れる。手書きの一点ものである絵巻などはなく、当初から印刷物という複製メディアを通して流通したのは、いかにも大衆のヒー

ローに相応しい。現存最古の文献は、一七三三(享保八)年に江戸で出版された赤本だが、爺婆が桃を食べて若返り、桃太郎を産むというところが、いわゆる「標準型」の桃太郎とは異なっている。それ以後、約三〇〇年の長きにわたり、絵巻、絵本、雑誌、唱歌、口演、映画、漫画、玩具、ゲームといった、ありとあらゆるメディアが登場し、尽くした桃太郎は、それを作り出す者の手によつて、千変万化に顔を変え、姿を変え、しばしば新たな意味づけを与えられてきた。

ところで、現在、私たちが目にする「標準型」の桃太郎話が全国に広まったのは、明治期以降のことである。特に、一八八七(明治二〇)年に初めて教科書に掲載されたから、第二次世界大戦の終結に至るまで、国語教材に採用され続けたことが、大きな影響力を持った。教科書に採用された「標準型」の話は、いわば「正しい桃太郎話」とし

て全国を覆った。そのことが引き起こした問題は、物語の筋ばかりに止まらない。多く子どもたちにとつて、祖母から聞いて慣れ親しんできた物語が、突然、教室の中での書物で読むものとして現れたのである。それを記すのも、土地のことばではない。いわば国家の言語として形成された、見慣れぬ標準語というものであった。桃太郎が初めて掲載された、文部省による『尋常小学読本』(一八八七)を開くと、言文一致体の成立に向けた当時の歩みが垣間見える。「むかし、ちぎ、と、ば」とが「有りました」と、わかち書きが採用され、難解な文語体を避けて、話し言葉に近い文体で書く努力がなされている。

また、教科書を通して桃太郎を学ぶことになったのは、現在の日本の領域内だけに止まらない。台湾や朝鮮半島から、インドネシア、南洋群島に至るまで、かつて日本が植民地や占領地とした地域においても、日本語教科書に桃太郎が掲載されている。それらの土地の人びとは、自分たちの母語とは全く異なる日本語というもので、見たこともない日本という国の物語を学んだのである。そして、台湾の蔡君のように、世代を超えて桃太郎の唱歌が歌い継がれている例さえあるのだ。

桃太郎が国家の物語へと変貌を遂げてゆく軌跡は、単なる物語のことと片づけてしまえない側面を持っている。海を渡って鬼を征伐し、宝を得て帰還する。ごく単純な筋立てだけに、いかようにも読み替えられる。それこそが、この物語の生命力であり、不幸の始まりでもあった。明治期以降、日本が対外戦争を繰り広げる中で、桃太郎はしばしば日本の兵士に読み替えられた。日露戦争開戦の年に発行された『征露再生桃太郎』(一九〇四)では、お爺さんの名は「エイゾー」、お婆さんの力(野)は「オアム」。イギリスとアメリカの国旗柄の服を着た西洋人だ。軍服姿の桃太郎は、キビダンゴの代わりに爆弾を携え、「おシナちゃん」と「おチヨちゃん」をいじめる悪者の「ロスケ」を征伐に向かうという設定である。

こうした読み替えは、第二次世界大戦時には、さらにその勢いを増した。日本軍の南進を報じた当時の新聞記事には、時に「海の勇士 鬼ヶ島征伐 ぶん捕り船でエンヤラヤ」などといった見出しが躍る。そんな時代の忘れがたい一点が、一九四二(昭和一六)年二月八日の真珠湾攻撃による大東亜戦争開始から二周年を記念して、軍部の指示で作成されたポスターである。日本桃太郎の会の会長として知られた、故小久保桃江(とうこう)さんが、戦中戦後の苦しい時代に命がけで守った資料の二つだ。「征け桃太郎、米英を撃て」。大書されたスローガンの下には、宝船が見える。帆には当時の日本の植民地や占領地が描かれ、船首に立つ桃太郎の後ろには、南洋の資源を手にした七福神が並ぶ。桃太郎が見つめる視線の先には、赤鬼の姿をした米大統領ルーズベルトがいる。当時の日本を取り巻く情勢が、凝縮された一枚だ。

桃太郎自身に罪はない。「モータロサン、モモタロサン」。蔡君の歌声を思い出すたびに、現代の桃太郎はどのような顔をしているのか、私にはそれがとても気にかかる。

◇筆者は専門は文化人類学・民俗学。早稲田大学大学院博士課程を経て、早稲田大学、東京芸術大学などで教壇に立つ。主な関心領域は、近現代における口頭伝承の変容と町づくりへの活用。共著に『桃太郎は今も元気だ』、『珊瑚の文化誌』(第二八回寺田寅彦記念賞)、翻訳書に『アメリカの空へ』など。

愛書狂

「二十代の頃、ずっと旅館の若旦那になりたかった」とは、なんと覇気の無い望みか。エッセイ集『活字と自活』(本の雑誌社)で萩原魚雷はそう書く。

現在四十歳のフリーライターで、三十過ぎまで年収二百万円以下の貧乏暮らしを続けていた▼しかし、彼はいかなる時も好きな本を読み続けた。電車賃をケチって、古本屋で一冊百円の文庫を買う日々。尾崎一雄、古山高麗雄、鮎川信夫など地味な書き手から、生き方を学ぶ。進退窮まった時も、尾崎の「とにかく生きてみてみよう」と考へ始める」という一行を読み、開き直るのだ▼『活字と自活』には、自分の歩幅に合わせた読書で、じっくりと人生を作り上げてきた男がいる。「おそらく好きな仕事に就くことよりも、自分のやっている仕事を好きになることのほうが簡単」と言い、「そのことを昔の自分に教えてやりたい」という一行が泣かせる▼そんな男がうろつくのが、東京・神田神保町。この町を舞台に「森崎書店の日々」という映画が作られた。今秋公開予定だが、ひと足先に試写を見た。神保町の裏路地にある古本屋「森崎書店」に、恋人に裏切られた若い女性がやってくる。店主とは叔父と姪の関係だ▼文学にまったく縁のなかった彼女が、次第に古本に染まっていく。最初に手を出したのは尾崎一雄の『まぼろしの記』というのがシブい。神田古本まつりの日、叔父が彼女に言う。「聞くまでは静かだけど、聞いてしまうと、とてつもない世界が広がっている。また閉じると静かになるんだ」。まるで本の世界みたい。(野)

ウィルバーフォース氏のウィンター・ワイン

『エクス・リプリス』第10回配本
ポール・トーデイ「作」

『イエメンで鮭釣りを』に続くトーデイ第二作！ ひよんなことからポルドーの虜となつた実業家ウィルバーフォースの転落を、苦いユーモアとともに巧みに描き出す長編小説。
（二〇〇六） ロンドンとのとある高級レストラン。ウィルバーフォースのお目当ては貴重な一九八二年のシャトー・ペトリュス。冴えない身なりにクレジットカードの提示を求められるが、ワインの知識でソムリ

ワインの海に溺れて

エを喰らせる。運ばれてきたペトリュスを口に含むと、亡き妻キヤサリンの幻覚を見、周囲に広がる驚きとさわめきのなか、二本目を頼む。だがやがて酩酊状態に陥り、店から丁重に追い出されてしまう。
翌朝、気がつく自宅のベッドの中。主治医からは完全なアル中だと宣告される。今や破産寸前の状況に怯えながら、酒びたりの生活の中で断片的に現われる過去と、幻覚に繰り返し悩まされる日々……。



ISBN978-4-560-08011-4

その後、（二〇〇四）から（二〇〇六）までワインの「ウィンター」になぞらえた年代を遡るうちに、冒頭で提示された混沌の背景が徐々に現われる。仕掛けと企みに満ちた、味わい深い一冊。
◇小竹由美子訳 四六判 三七九頁 定価二七三〇円（本体二六〇〇円）

ジョージ・オーウェル日記

ピーター・デイヴィソン「編」



英国の作家ジョージ・オーウェルは、全体主義を厳しく批判した小説『動物農場』や『九八四年』、スペイン市民戦争の証言となったルポ『カタロニア賛歌』などで世界的に知られる、二十世紀を代表する巨匠だ。一九五〇年に没してから今年で六十年になる。本書は英国で刊行された、詳細な注を施した全集（二十巻）のうち、一九三三年から四九年までの、現存する十二冊の日記と二冊の手帖を一冊にまとめた、たいへん貴重な一次資料だ。

没後60年記念出版

ロンドンの最低辺生活者として行動を共にし、ホップ摘み労働を体験した「ホップ摘み日記」、大不況下の炭鉱地帯に入り、労働者の過酷な労働と生活に共感をこめて活写した『ウイガン波止場への道』日記、海外滞在記である『モロッコ日記』と『マラケシュ・ノート』、第二次大戦が勃発し、BBCで宣伝番組の制作に従事し、空襲に見舞われる様子や愛国心を綴った『戦時日記』、戦後、結核に罹り、孤島の農場に引きこもつて、農耕、釣り、自然観察を記録した『家事日記』など作家の全貌を知ることができ、オーウェルは伝記が書かれることを嫌っていたというが、この日記が彼の人生を物語る実質的な「自伝」になっていることは、興味深い。
◇高儀進訳 A5判 六一〇頁 定価八八二〇円（本体八四〇〇円）9月下旬刊

東京のハーケンクロイツ

東アジアに生きたドイツ人の軌跡

ISBN978-4-560-08088-4

一九四五年五月初旬、東京のドイツ大使館ではハーケンクロイツの半旗が掲げられていた。そこには在日ドイツ人をはじめ、日本の外務省や陸海軍の関係者、アジア各国の大使が集まっていた。これは、ドイツ降伏後に催されたアドルフ・ヒトラーの追悼式である。このような式は中国の天津でも開かれたという。
ドイツから遠く離れた東アジアの地に暮らすドイツ人は、

ドイツらしさとは何か



本国と異なる状況下でどのようにナチズムと向き合い、いかにそれを信奉していったのか。また、アリア人を理想とするナチのイデオロギーは、さまざまな文化が共存するこの地でいかなる変容を余儀なくされていたのか。
本書では、日本・中国・ドイツ・アメリカの公文書や当事者へのインタビューなどから、かれらにとつての「ドイツらしさ」を明らかにしていく。ナチズムの受容や浸透を考えるうえで刺激的なものであるとともに、日本や中国の近代の歴史を論じるうえでも大いに示唆に富む一冊である。
◇四六判 三二〇頁 定価二九四〇円（本体二八〇〇円）9月下旬刊

ナポレオンの妹

フローラ・フレイザー「著」

ナポレオンには七人の兄弟姉妹がいた。本書は、ナポレオンがもつてこずり、そしてともに愛したと言われる十二歳年下の妹ポーリーヌの伝記である。
ポーリーヌは十六歳で軍人と結婚。一児を得るが、植民地サンディマンゲ（現ハイチ）で夫を黄熱病でなくす。その半年後ローマの名門ボルゲーゼ侯爵家の子息と再婚。貴族の称号と莫大な富を得ると同時に、皇帝となった兄の権勢を背景に社

交界に君臨するようになる。一人息子を病気で失ったのちは夫を顧みることなく、多くの愛人と浮き名を流し続けた。たぐいまれな美貌、完璧なポーリーヌとともに、これまでポーリーヌについては「わがまま

妖婦か？ ヴィーナスか？



ISBN978-4-560-08090-0

ヴェネツィア・ミステリーガイド

市口桂子「著」

ISBN978-4-560-08088-7

ツアーだとせいぜい一泊二日。サンマルコ寺院、ゴンドラ遊覧、買い物だけで終わってしまう「水の都」の本当の魅力をたづね味わってほしいと、ポーリーヌ在住の女流作家が丹念に取材、四泊五日の島巡りを計画した。

たとえば一日目。ドゥカレ宮殿の秘密ルートをたどる、現地ツアーはいかが？ これは女たらしで知られたカザノーヴァの脱獄の様子を見学するもの。宮殿の四階にある大扉

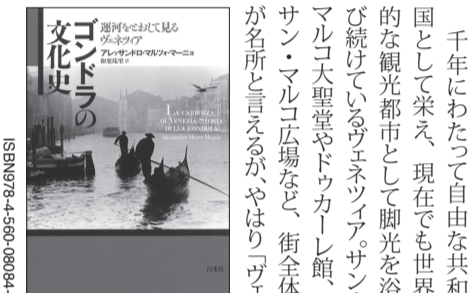
四泊五日で巡る、ディープなヴェネツィア

から始まる探検は、牢獄の構造や共和国政庁の裏側を教えしてくれる。
二日目。ヴェネツィア本島から千潟の島々へと足を向けてみよう。ガラス博物館に立ち寄ったあとは、墓島へ。死体を埋める場所の少ないヴェネツィアでは、島をまるごと墓にした。そこにはディアギレフやストラヴィンスキーが今も眠っている。そんなふうに、ゲットー発祥の地となったシナゴグを訪ねたり、サンタ・ルチア周辺の聖女ルチア受難劇の秘密を

ゴンドラの文化史

アレックスサンドロ・マルツォ・マーニョ「著」

運河をとおして見るヴェネツィア



ISBN978-4-560-08084-9

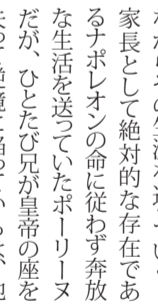
ゴンドラの過去、現在、未来

千年にわたって自由な共和国として栄え、現在でも世界的な観光都市として脚光を浴び続けているヴェネツィア。サン・マルコ広場やドゥカレ館が名所と言えるが、やはり「ヴェネツィア」といえばゴンドラ（本書「訳者あとがき」）だろう。ただ、ラグーナ（潟）の泥の上に築かれたこの独特の都市を題材にしたものは掃いて捨てるほどあるのに対し、なまめかしく非対称にカーヴした漆喰の摩訶不思議な艇体をめぐる物語に焦点を当てたものは意外なことには皆無と言つていい。
本書は、ヴェネツィアに生まれ育ったジャーナリストが、新聞や雑誌から、文学作品や映画、はてはインターネットまで、およそ考えられるすべての媒体

ベルリン終戦日記

ある女性の記録

A・ビーヴァー序文 H・M・エンツェンスベルガー後記
山本浩司訳 ■定価二七三〇円（税込）



ISBN978-4-560-08088-7

日記で触れる肉声

陥落前後、不詳の女性が周囲の惨状を赤裸々につづつた稀有な記録。生と死、空襲と飢餓、略奪と凌辱、身を護るため赤軍の「愛人」となった女性に安穩は訪れるのか？ 胸を打つ一級資料！

カフカ実存と人生

フランツ・カフカ著 辻理編訳 ■定価二六二五円（税込）



カフカの世界、それは名状しがたい不安の告白であり、日常生活における『ある闘い』の記録である。カフカが書き残した多くのアフォリズムと日記を編纂した本書は、謎を秘めた彼の文学を映し出す。

ある首斬り役人の日記

フランツ・シュミット著 藤代幸一訳 ■定価九八八円（税込）



生涯に三六一人を処刑した中世末期ニュルンベルクの死刑執行人フランツ親方が、その仕事ぶりを克明に記した日記。当時の犯罪の生々しい一覧表にして文化史、民俗史の貴重な史料である。

畑の向こうのヴェネツィア

仙北谷茅戸著 ■定価一八九〇円（税込）



ヴェネツィア近郊の町ノアーレ。そこに暮らす日本人女性とその家族の四季折々の生活と過ぎ去りし日々への思いを、匂い、音、色彩といった感覚をもとに描いた追憶のエッセイ。

ヴェネツィアの宿

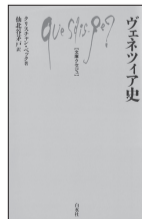
須賀敦子著 ■定価九八八円（税込）



旅人の心をなごませるヴェネツィアの宿で思いめぐらすはかな記憶。少女時代から、孤獨な留学時代、父の死にいたるまでの、父親と親族をめぐる葛藤、自身の心の軌跡を描いた自伝的エッセイ。

ヴェネツィア史

クリスチャン・ベック著 仙北谷茅戸訳 ■定価一一〇三元（税込）



イタリア半島の付け根に位置する水の都、ヴェネツィアの歴史を、その起源から今日まで政治・経済・文化の諸相にたどる。芸術家たちをも魅惑してやまない都市へのオマージュ。

白水社の本棚

読んで味わうヴェネツィア

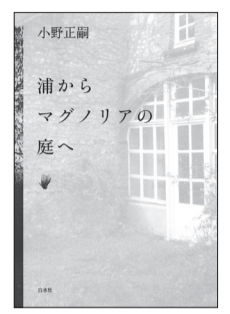
白水社の本棚

小野正嗣 [著]

ISBN978-4-560-08086-3

美しく咲くマグノリアの大きな庭で、僕は故郷についての小説を書き始めた。フランス語圏の文学の影を受けて、世界文学の教養が凝縮された日本語文学(陣野俊史)の担い手として、日本文学の新しい可能性を切り開きつつある注目の作家、小野正嗣。

本書は、そんな小野がデビュー十周年を期して初めて問う、待望のエッセイ集である。大分の最南端に位置する「浦」である故郷・浦江をめぐりながら始まり、カリブ海のフランス語文学研究のため二〇〇代後半で渡った留学先パリでの、フランス文学研究の泰斗にして社会への温かく鋭い行動者・発言者として生きるクロード・ムシャール氏との運命的な出会い、ついには彼のアルトマンに寄宿するにいたり、そこで経験した忘れがたい人々との交流――貴重なエピソードの数々を、初めて直接的に語った自伝的長篇エッセイ「浦からマグノリアの庭へ」を中心に、ボルクス、ラブレ、マリー・ンディ



気鋭の作家初のエッセイ集

アイ、カズオ・インゲロ、大江健三郎、中上健次など国内外の作家たちをシャープに論じた世界文学・作家論、さらに「狼たちの月」「ジーザスサン」「ロード」などそのセンスあふれる選書眼と的確な評言で多くの読者をうならせた「読売新聞」読書欄での書評の数々を収録した、楽しく読みながら、世界文学/日本文学の最前線と多様な驚きに満ちたこの世界の豊かさに触れられる、稀有なエッセイ集である。

◇四六判 二六四頁 定価 二二〇〇円(本体二〇〇円)

【刊行記念イベントのお知らせ】
小野正嗣ミニトーク&サイン会
日時 9月18日(土) 14時
会場 青山ブックセンター六本木店
電話予約&お問い合わせ
03・3479・0479

四方田犬彦 [著]

ISBN978-4-560-08093-1

著者はこれまで批評家として、専門の映画史研究を中心に、文学、漫画、音楽評論、エッセイ、翻訳など、百冊を越える著書書を世に送り出してきた。しかしそれは、「他人」という媒体、「作品」という媒体を経て、膨大な書物や資料に依拠して、著したものであった。いまや著者は中年のさなかにあり、自分の過去にまつわる、ある大きな仕事を終え、忌まわしい苦しみからも解放され、本書で初めて、「自分自身について書くこと」に挑んだ。

自分を見つめ直し、それを自由な文体で書き記してみること、参照すべき資料などに頼らず、ただ記憶と洞察の赴くままに、自分の来し方を振り返ってみることにある。

「恋愛の終わり」では、バルトやジヤンメル、『葉隠』に触れつつ、恋愛とは一種の才能のようなもので、人間が自らの不平等を徹底して思い知らされる事件である、と喝破する。

「本と娼婦」では、両者に似

四方田版『エッセー』、書下ろし!

通った関係を見出したベンヤミン、アドルノの書物論に言及しつつ、人生を形成してきた書物や、再読、再々読するであろう書物を挙げる。

「憎悪と軽蔑について」では、イスラエル滞在の経験をもとに、ユダヤ人とパレスチナ人の対立、キリスト教と被差別民族の関係、さらには肉親への思いを吐露する。

そのほか、「職業」「旅」「世代」「国家」「友情」「無為」「古い」「死」などを主題に、全十八章を書下ろした、まさに四方田版『エッセー』。人生の薄暮に迷える足元に、ほんのり明かりを灯してくれる、好個の書。

◇四六判 二二六頁 定価 一八九〇円(本体一八〇〇円)
9月下旬刊



ベルント・ブルンナー [著]

ISBN978-4-560-08085-6

「三匹のくま」、「くまのプーさん」、「ジャンゲル・ブック」、イソップ物語、グリム童話……熊ほど人間に愛され、その想像力に訴えてきた動物はいないだろう。その一方で、熊は古くから狩猟の対象として狩られ、また信仰の対象として崇められてきた。狩猟家としても名を馳せたセオドア・ルーヴヴェルトがその名の由来となったデディベアに象徴されるように、熊はなぜこれほどまでに人間に相矛盾する感情を抱かせるようになったのだろうか。

有史以来、熊は人間にとって特別な位置を占めてきたが、その長い歴史を遡るとき、「親しみ」と「畏怖」という熊に対する人間の相反する感情が見えてくる。本書では、その複雑な感情を読み解きながら、両者の間に横たわる矛盾に満ちた歴史を、十六の切り口から多角的に考察する。

神話や宗教、伝承、文学、



「親しみ」と「畏怖」の歴史

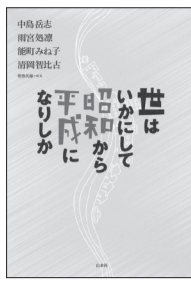
科学などの分野における、さまざまな時代の人々による証言、観察記録が紹介され、伝説や言い伝えなども丹念に集められている。人間と熊との関係においては、歴史的・地理的要素など多様なレベルでの違いが存在するが、熊に対する「正しい」認識を決定するのではなく、熊に対して人間が抱いてきた複雑な認識を解くことを本書は目指している。

「地球上の多くの地域で熊はすでに姿を消してしまっているが、われわれの個人的、集合的な夢にとつてはいまだに大きな位置を占めているのである。」(序文より)

◇伊達洋訳 四六判 二五四頁 定価二二二〇円(本体二四〇〇円)

世はいかにして昭和から平成になりしか

中島岳志、雨宮処凛、能町みね子、清岡智比古 [著] ISBN978-4-560-08094-8 管 啓次郎 [序文]



昭和から平成へ向かう時期、それまで想像もしなかった現象が次々に起こった。冷戦の終結、バブルの崩壊、労働市場の自由化……。その中で青春期を過ごした者たちには「生きづらさ」がまといつく。たしかに、何が終わり、そして私たちはまだその途上を生きている。

この本は、そんな時代の輪郭を、社会や政治、経済の分野ではなく、きわめてプライベート

「世界」の肌ざわり。その驚くほど率直な言葉は、凡百の社会批評よりはるかに能弁で切実だ。

「時代」を、そして「世代」をいくらうとましく思っても、人はそこから逃れることはできない。「ここにさし込まれた声のコレクションを通じて、過去二十年ほどの日本社会の変遷を思い起こすことは、きみが二十歳でも七十五歳でも、同様に有用な経験となるだろう。」(管啓次郎・序文より)

◇四六判 一八六頁 定価二七八五円(本体一七〇〇円) 9月中旬刊

【刊行記念イベントのお知らせ】
著者4人によるトークイベント
日時 10月12日(火) 19時30分
会場 青山ブックセンター本店
予約&詳細
http://www.aoyamaboc.co.jp/

戦争と広告

馬場マコト [著] ISBN978-4-560-08091-7



広告依頼主は内閣情報局。仕事は戦意高揚をはかるためのポスター制作や、全国で開かれる展示会の開催など。任されたのは、当時最前線の感性とノウハウをもとに、大きな注目を浴びていた男たち。

その一人を山名文夫と名づけた。アール・デコ調に彩られ、流れるような曲線

を活かしながら、洗練された女性をイメージさせる「資生堂スタイル」を確立したデザイナー(当時は凶悪家だ。今もその名を冠した権威ある賞がついている)。

もう一人は、森永製菓宣伝課に入社したばかりの新井静一郎。上司の小泉武治とともに、当時あこがれのお菓子として知られていたチョコレート部門を担当していた。

だが、時代は軍国主義一色で、彼らは思うような広告活動ができない。思い余った彼らは「報道技術研究会」を立ち上げ、広告の可能性を探ろうともがいていた。

そこに目をつけたのが内閣情報局だった。国民の意識を戦争協力へと向かわせるための情宣活動に彼らを利用していく。

そして戦後。依頼主側も受け手側も、何事もなかったかのように、再び元の仕事に戻る者もいれば、固く沈黙を守ったまま、別の業種へと移る者もいた。

本書は第一線で活躍中のアートディレクターが、「もし当時自分が依頼されたらどうするか」という独自の視点で、彼らの足跡を追った力作である。全力で仕事をこなそうとする彼らを描きながら、戦争のもつ悲しい宿命を提示していく。

◇四六判 二四〇頁 定価二二二〇円(本体二四〇〇円) 9月中旬刊

訳者の工夫が結実した一冊

他にも、登場する小説を邦訳のないものまで翻訳前に読破するなど、訳者の工夫が結実した一冊。読んで笑って、ためになる。翻訳小説の理解に必読のお薦め本です。(担当編集者・K)

発売後、忽ち重版! 話題の本

二十世紀の巨人の実像に迫る!

毛沢東 ある人生 (上・下)

フリップ・シオート著 山形浩生、守岡桜訳

フランス宮廷生活の実態とは?

ヴェルサイユ宮殿に暮らす 優雅で悲惨な宮廷生活

46歳、無職、どこにも居場所がない…

《エクストリプリス》 そんな日の雨傘に

ヴァイルヘルム・ゲナツィーノ作 鈴木仁子訳

「今回のピックアップ本」 トーマス・C・フォスター著 矢倉尚子訳 『大学教授のように小説を読む方法』



アメリカの大学教授による、一歩踏み込んで小説を読み解くための25のヒント。『登場する作品』『老人と海』『クリスマス・キャロル』『時計かけのオレンジ』など ●定価二九四〇円(税込)



「仏英日対照 ビジネスフランス単語集」

横田 納 [著] ISBN978-4-560-08542-4
フランス語力でビジネスに差をつける!
英語が世界共通語化しているとはいえ、フランス語圏の国々におけるビジネスを効果的に進めるためには、フランス語の語彙力、コミュニケーション力が重要なポイントです。経済、金融、財務、産業、企業、貿易など最新 2800 語を網羅。豊富な用例はすべて仏英日で表記しています。巻末には便利な日本語索引付。フランス語力でビジネスに差をつけよう!
◇四六判 230 頁 定価 2940 円 (本体 2800 円)



「しくみが身につく中級ドイツ語作文」

清野 智昭 [著] ISBN978-4-560-08541-7
作文をとおしてドイツ語の語感を身につける
「模範解答が正しいのはわかる。けれど、自分が書いた文は合っているのか間違っているのかわからない」。本書では模範解答だけでなく、ドイツ語の文をつくる際に学習者がおかしやすい間違いや疑問点をゆっくりと丁寧に解説していきます。学習者のみならずドイツ語の先生の間でも大きな話題となった『中級ドイツ語のしくみ』の著者がおくる、独作文の新たなスタンダード。◇A5 判 197 頁 定価 2415 円 (本体 2300 円)



「中国語検定対策 3 級問題集」CD 2 枚付

伊藤 祥雄 [編著] ISBN978-4-560-08543-1
11 月の中検に向けて、この一冊!
過去問を掲載し、狙われやすいポイントを解説した問題集。いくつもの文法事項がからむ、手ごわい問題続出の 3 級では、基本をおさえた上で練習を積むことが大切です。最新の傾向をふまえた練習問題で、着実に得点力アップを目指しましょう。リスニングは実際の試験と同じ形式で CD2 枚に収録。巻末には模擬試験・単語リスト付。
◇2 色刷 A5 判 203 頁 定価 2310 円 (本体 2200 円)
* 4 級対策にはこちら→「中国語検定対策 4 級問題集」定価 1890 円 (本体 1800 円)



「ホームステイのスペイン語」CD 付

立岩 礼子 [著] ISBN978-4-560-08544-8
ステイ先の家庭で、街に出て、何でも話そう
スペイン語圏への留学で必ず役立つ表現を集めました。ホストファミリーへの挨拶からお別れまで家庭での「ステイ編」、学校や街での「シチュエーション編」、フラメンコやアルバイトなど「自分だけの留学プラン」、よく尋ねられる「日本についての話題」、日常的な表現や語彙をまとめた「確認しておきたい表現と文法」。CD 付で便利!
◇四六判 170 頁 定価 2310 円 (本体 2200 円) 9 月下旬刊

本の十字路

自転車で遠出をすると言った場合、ママチャリならだいたい二〇キロくらいだろう。スポーツバイクの世界では一般に二〇〇キロがひとつの「壁」といわれている。しかし、『自転車で遠くへ行きたい』(河出書房新社)の米津一成氏は二〇〇キロでは物足りず、四〇〇〜六〇〇キロ走ることもあるという。東京―神戸間を一気に……? こういうのを「距離感が壊れている」というらしい。その自

転車がどう加速し、どう曲がり、どう止まるかを追究したのが、ふじのりあき著『ロードバイクの科学』(スキージャーナル)だ。横組みだし、なつかしい三角関数や、記号などが出てきて、数学オチの私ほどこたえを見つらなくなる。技術屋さんならではの徹底した掘り下げぶりがめつぼう面白い。この理論に基づけば、一日に二〇〇キロくらいはいけそうな気がする。(クロボト)

今年度の東京の夏は久々の猛暑、酷暑でした。三十度はおろか、三十五度を越える日が何度もあり、かなり体力を奪われた夏でした。毎日のように熱中症のニュースを聞いていますと、営業に出ることは命懸けの仕事なんだと改めて思います。そんな暑さもなんのその、営業に行けば、書店員さんは「こんな暑い中わざわざいらしていただいて……」と迎えてくれます。ただ書店内は冷房が効きすぎていないのか、カーディガンや羽織っている方も多く、外の暑さと比べ実に不思議な光景です。▼また自分でも涼をとろうと実践していることがあります。電車の中で冷え切っているうちに、駅から離れた書店へ向かう、汗だくで書店に入るのは失礼なので、ビルの上層階の書店へ行く時はエレベーターを使わずにエスカレーターを使う。ただし、涼むためだけに書店で長居はしないように、ここが肝心なところですよ。

【お願い】▼住所表記が変更になりましたら、お名前、新住所・旧住所、お届けいたしておきます本紙のお客さまコードをお知らせください。

現在放送中の NHK の連続テレビ小説『ゲゲゲの女房』をかかさず見ている。漫画家水木しげる氏の妻武良布枝さんの自伝を原案にしたもので、放送開始当初こそ視聴率は伸び悩んだが、その後じわじわと数字を上げてきたという。水木漫画にも連続テレビ小説にもそれほど関心がないのに視聴率を続けているのは、さまざまに編集者が登場する点にひかれていたり、伝説の漫画雑誌『ゼタ』の深沢や水木にほれ込んで零細出版を立ち上げる成井、大手雄玄社の豊川。それぞれ立場は異なるが、自分の「見立て」を信じて時代を歩いていく姿は励みになる。毎朝、編集者として時代の本筋が読めているか、自問しつつ家を出る日が続く。(園)

は、さまざまに編集者が登場する点にひかれていたり、伝説の漫画雑誌『ゼタ』の深沢や水木にほれ込んで零細出版を立ち上げる成井、大手雄玄社の豊川。それぞれ立場は異なるが、自分の「見立て」を信じて時代を歩いていく姿は励みになる。毎朝、編集者として時代の本筋が読めているか、自問しつつ家を出る日が続く。(園)

ことば紀行

リレーエッセイ

第3回 石井 裕

サンスクリット

【サンスクリットとは】インドの古典言語【使用文字】デーヴァナーガリー文字など【話者数】数千とも数万とも【あいさつしてみよう】
नमो नमः (ナモー ナマハ)
※原意は「あなたに敬礼」。人と会ったときや別れるときに言う。時間帯や間柄を問わずに使える最も汎用性が高い挨拶言葉。

留学先のホストファミリーと (後列筆者)

「じゃあサンスクリットで話せますか？」寝台列車で相席したインド人が訊いてきた。インドにいた二年半の間、この質問を何十回聞いただろう。インド人は話せることこそ言語を習得した証と考えサンスクリット(梵語)もその例外ではない。インドでは古典学者がサンスクリットで議論や著作をし、ごく凡庸なサンスクリット教師や学生でも日常会話程度はこなす。このあたり同じ古典語でもラテン語や漢文などとひと味違う。そうした「サンスクリット人」達の間で二十四時間サンスクリット漬け生活を送ろうというのが古典研究の本場ヴァラナシ(ベナレス)に留学地を決めた私の目論見だった。おかげで留学中はその環境をフル活用、「実用」サンスクリットの腕を磨くことができた。

多くのインド人は「外人=英語」と思いこんでいるから我々が片言でも現地語を話す

と喜ぶ。だがひとたびその外人が彼らの誇る「神々の言語」の研究者と聞けば、驚きと喜びの中にも「我々にも難しい言葉を外人ができるものか」という侮りが混じる。それが冒頭の問いになる訳だがそれを逆手にとってサンスクリットでしゃべりまくって、インド人のポカンとした顔を見るのが私のひそかな楽しみだった。連中ときたら話させてお

サンスクリットで会話する

きながら聞いてもチンプンカンプンなのだ。そのときも私は苦手なヒンディー語で溜まった鬱憤を晴らすかのようにサンスクリットでまくしたてたがあにはからんや、いつもと反応が異なり平然と「流暢なものですなえ」相手はサンスクリットで返ってくる。聞けば、彼自身は商売人だがサンスクリット教師だった祖父に幼い頃からサンスクリットを叩き込まれたそう。

「数十年ぶりにサンスクリット会話をしたい」という彼のリクエストで、夜行列車が突如サンスクリット会話教室に早変わり、しばしば言葉に詰まる彼のサンスクリットを聞き文法的間違いなどを私が直してやる。それでも二、三時間経つと勘を取り戻したのか大分滑らかに話すようになり、さすがはインド人といったところ。サンスクリット文学から仕事や家族の話、日本とインドの比較というように話題は尽きない。気がつけばいつしか日付が変わろうとする頃あい、下車が早朝のためそろそろ寝たいと思ったそのとき、不意に彼が私の表現の誤りを指摘した。私が納得して訂正すると「一本取った」と言わんばかり、ニンマリ笑う。「疲れませんか? もう寝ましょう」と言うや否やベッド・メイクもそこそこに寝台で寝息を立て始めたのだった。

なんとなく小憎らしい。(東京大学大学院生)

白水 U ブックス

文庫クセジュ

U1118 「比類なき モーツァルト」

ジャンニヴィクトル・オカール [著] ISBN978-4-560-21818-6

Q949 「十七世紀 フランス文学入門」

ロジェ・ズベール [著] ISBN978-4-560-50949-4

Q950 「100語でわかる エネルギー」

ジャンニマリ・シウヴァリエ [著] ISBN978-4-560-50950-0

モーツァルトは、さまざまな国の音楽の美点を取り入れ、過去の作曲技法を使いこなし続けた。北方音楽の堅牢な構築と南方音楽の生気に満ちたメロディ、パッサによる対位法の可能性とハイドンによる主題的音楽言語……。一方で、彼だけの特別な技法というものはもたなかった。モーツァルトの作曲法は時代を超越していたわけではなかったが、その音楽は同時代のどの作曲家とも異なっていた。では、モーツァルトの音楽の何が、彼を唯一無二の存在にしたのだろうか? 作品にみる「モーツァルトらしさ」とは、いったい何だろうか?

モーツァルトを愛する者の誰もが抱くはずの問いについて、二十世紀後半を代表する研究者のひとりである著者とともに考える一冊。

◇武藤剛史訳 新書判 二〇六頁 定価二二六五円 (本体二〇〇〇円)

ルイ十三世と宰相リシュリューの執政、そして長期にわたるルイ十四世治世下の文芸を解説。この絶対王政期では、作家は君主を格調高く礼賛することによってその治世を助け、支配者は言葉(パロール)の芸術の特殊性と自律性を理解していた。十七世紀は、「デカルトによる哲学の基礎づけ」という一大変革がおきた時代だが、文芸に固有の「想像力」と「よき趣味」こそがフランス精神をもたらしたものだ。マルレブ、ラファイエット夫人、ラ・フォンテーヌ、古典三大劇作家などの作品紹介と、アカデミー・フランセーズの発足、ペロラによる新旧論争なども含めて、手際よくまとめられている。

◇原田佳彦訳 新書判 一七二頁 定価一一〇三元 (本体一〇五〇円)

イランは、世界第三位の産油国でありながら、適切な精油施設がないため、国内で消費するガソリンの半分を輸入に頼っている。ブラジルでは、新車の八割以上が、ガソリンもエタノールも区別なく使えるフレックス車である。

本書では、このような各国のエネルギー事情を紹介しながら、エネルギーの現状を知り、将来への展望をひらくために必要なキーワードがまとめられている。「ニーズ」「資源」「貿易」「市場と価格」「アクター」「課題」という六つの章に分けて、わかりやすく解説するなかで一貫しているのは、エネルギーを環境問題と不可分のものとして考える姿勢だ。

◇斎藤かぐみ訳 新書判 一四〇頁 定価一一〇三元 (本体一〇五〇円) 9 月中旬刊

刊行30点突破! 大好評の入門書

《ニューエクスプレス》フェア

「入門書の決定版」として好評をいただいている《ニューエクスプレス》シリーズ。刊行30点突破を記念して、フェアを開催します。

ラインナップより

フランス語・ドイツ語・スペイン語・イタリア語・ロシア語・中国語・韓国語・アラビア語・チェコ語・スワヒリ語…など既刊 35 点

◎詳しくは白水社ホームページをご覧ください。

クセジュでしか読めない!

《文庫クセジュ》ワンテーマ・フェア

今回のテーマは「おもしろ文化史」。翻訳新書の《文庫クセジュ》ならではの、他にはないユニークなタイトルがいっぱい!

ラインナップより

『性関係の歴史』
『書物の歴史』『お風呂の歴史』
『大学の歴史』『石油の歴史』
『100語でわかるワイン』
『スポーツの歴史』…など

秋の書店フェア情報